特別講演

O157 流行とハエの関わり

安居院宣昭(国立感染症・昆虫医科学) O157-outbreak and possible roles of the fly as O157-transmitter. Agui N.

平成8年、全国規模で発生した O157 による集団食中毒では、感染者数 19,352 名(有症者 17,877 名)死者 12 名に及んだ。そして、今日でも O157 感染の散发事例は依然として続いており、その感染源・感染経路はいまだに不明な部分が多い。O157 感染と衛生害虫との関わりは、平成8年10月、佐賀県での O157 患者発生施設内・外で、イエバエから O157 が検出されたことに端を発している。この発見を契機に、感染症、地研、大学の専門家により、ハエ類と O157 の関連性を解き明かす一連の研究(厚生科学研究事業)として、①患者発生施設周辺におけるハエ類の発生環境現地調査、② O157 保有バエ分布に関する全国調査、③イエバエへの O157 摂食感染基礎実験等が実施された。その結果、O157 保有バエの全国的な分布事実、イエバエが単純な機械的伝播者でないこと等が明らかとなり、ハエ類の O157 の感染経路への関わり的一端をひも解くことができた。したがって、ハエ類の持つこのような伝播能力と、O157 の強い感染力の両特性を考慮すると、O157 保有バエの確認現場では、O157 等保有家畜対策、ハエ発生源対策、ハエ駆除対策、及び食品関連施設内へのハエ類の侵入防止策等の多面的な対応が求められよう。

2 洞爺湖中島のエゾシカにおけるマダニ相 ○伊東拓也・高橋健一・浦口宏二(道衛研・医動物) Ixodid ticks collected from sika deer in Nakajima island in Toya lake, Hokkaido. Takuya Ito, Kenichi Takahashi and Koji Uraguchi

北海道胆振支庁管内洞爺湖のほぼ中央に位置する中島には、エゾシカが生息し、近年個体数の増加により、エゾシカ個体群の質的低下と植生の変化が問題となっている。演者らは、北海道環境科学研究センターの調査に同行し、生体捕獲したエゾシカ上のマダニを採集した。調査は、97年7月・10月および98年5月の3回行い、合計 30 頭のエゾシカからマダニを得た。マダニは、アルパイントラップを用いて捕獲後麻酔したシカ上より、ピンセットを用いて採集した。同時に、旗ずり法を用いて植生上から、また、シャーマントラップを用いて小哺乳類上からマダニを採集した。得られたマダニは、フタトゲチマダニ *Haemaphysalis longicornis*、キチマダニ *H. flava*、ダグラスチマダニ *H. douglasi sensu* Kikawa およびシュルツェマダニ *Ixodes persulcatus* の 4 種であり、いずれの種類も、幼・若・成虫ともに大型哺乳類に寄生することが知られている。一方、周辺地域で優占するヤマトマダニ *I. ovatus* や、タヌキマダニ *I. tanuki* は得られなかった。

一般講演

1 北海道で初めて確認されたセグロアシナガバチと刺傷事例 ○高橋健一・伊東拓也(北海道衛研) 三国直樹(札幌市保健所) 松浦誠(三重大) First record of *Polistes jadwigae* in Hokkaido with its sting case report. Kenichi TAKAHASHI, Takuya ITO, Naoki MIKUNI and Makoto MATSUURA.

札幌市北区の新築住宅で1998年1月5日から室内にハチが発生し始め、1月19日までに11個体が採集された。また、1月6日には主婦が室内に発生したハチに左足薬指を刺された。得られた標本を検討したところ、セグロアシナガバチと同定された。本種の分布は、国内では、本州、四国、九州、南西諸島で、北海道ではこれまで記録がない。今回は、建物内で新女王が越冬していた事例であるが、建材などとともに人為的に新女王が運ばれたか、周囲に生息していた個体が越冬のために侵入したかは不明である。また、今回、室内の暖房により越冬中の本種が活動を始め、刺傷事故が発生している。アシナガバチは建物内で集団で越冬することがあり、越冬した新女王による室内での刺傷事故について注意を要することを今回の事例は示している。

3 札幌市の市街地およびその周辺に出没するキタキツネの食性 ○浦口宏二¹・塚田英晴²・高橋健一¹(¹道衛研・医動物、²北大・獣医・寄生虫) Food habits of the urban fox in Sapporo, Japan. Kohji Uraguchi, Hideharu Tsukada and Kenichi Takahashi

キタキツネは、人獣共通寄生病エキノコックス症の媒介動物であり、近年、札幌市をはじめとする都市の市街地にも出没するようになってきている。これらのキツネが、どのような資源を利用して生活しているのか、そして、エキノコックスの生活環が市街地においても成立するのかを検討するため、これらのキツネの胃内容分析を行い、食性を明らかにした。材料として、1996年4月から1998年3月にかけて札幌市の市街地およびその周辺で事故死したキツネ75頭から胃を採取した。加熱処理後、胃内容をバットに分け、未消化物を肉眼と実体顕微鏡下で、哺乳類、鳥類、魚類、昆虫類、植物、残飯等に分類した。分類した未消化物は、品目ごとに分け、乾重量を0.001gまで測定した。札幌市の都市周辺で事故死したキツネの食性(乾重量比)には以下のような傾向が認められた。1. 主要な餌品目は残飯、哺乳類、鳥類であり、残飯の割合がもっとも高かった。2. 哺乳類と昆虫類の乾重量比には季節差が見られ、哺乳類は春に多く、昆虫類は夏に多かった。残飯は哺乳類と逆の傾向を示した。3. 哺乳類は、同定不能の骨片等を除き、乾重量の3/4以上がネズミ類であった。4. ネズミ類は21個の胃から検出され、7個からは *Clethrionomys* 属のみ、12個からは *Rattus* 属のみ、2個からは両属が出現した。5. *Clethrionomys* 属は、1例を除き、市街地外で死亡したキツネのみから検出された。これに対し *Rattus* 属は、12例中8例が市街地内部で死亡したキツネから検出された。